

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

夏の日読書のために 2

総理大臣へのプレゼント 鎌田慧 22

水牛かたより情報 12

「カフカ」ノート 高橋悠治 24

キリコのコリクツ 玖保キリコ 14

走る・その六 デイヴィッド・グッドマン 26

かえるの頭を持って黒姫行き 柳生まち子 17

VOL.8 NO.6

毎月1回・10日発行

定価200円

夏の日
の読書のため
に
玖保キリコ
高橋悠治
田川律
三宅榛名
平野甲賀
平野公子
藤本和子
津野海太郎
八卷美恵

「サーカス」 ミヒャエル・エンデ
岩波書店

これは本当に子供のための本なのだろうか——というのが、この本の読後感である。ファンタジーと現実が交錯した、この不思議な雰囲気、戯曲は、読む者を迷宮に迷い込ませる。喜ばしい結末を迎えるファンタジーを取り囲んでいるのは逃れようのない敵しい現実であり、読み終わった瞬間に、あたかも暗く黒い深淵に引き込まれるような絶望感に襲われるのである。しかし、次の瞬間、「まてよ。これはもしかしたら、ファンタジーの方が現実であって、現実の方は本当は現実ではないのかもしれないぞ」という気持ちもわき上り、夜明けの前の気配のようなかすかな希望が、この話の終わりには用意されているのかもしれないとも思えるのだ。

童話だもの。これは確かに童話だ。エンデが、子供たちに希望を与えずに終わらせるはずがない。

しかし、しかし、やはり、全体に流れるこの黒い憂鬱はなんなのだ。

……とネチネチ果てしなく悩み続けるのがなかなか快感な一冊である。

(玖保キリコ)

「遠い部屋 遠い声」 カポーティ
新潮文庫

微熱をもったまま、ずっと薄暗い中をさまよい歩いていかなければならぬ、そんなイメージの本である。

この本の中には、昼間の情景だって描かれているのだが、何故か私は夜を連想してしまう。夜なのか夢なのかわからないような夜なのだ。その夜の中を、主人公の少年が進んでいく。生きているのは彼と、その連れ少女だけ

で、その他の人間は作り物のように見えてしまう。

作り物の人間たちは、よくディズニ映画に出てくる夜の人気のないおもち工場に置かれたおもち達のように不気味である。私はこの話がとても恐い。

(玖保キリコ)

「カンガルー日和」村上春樹 平凡社

私がこの本を好きな理由は、とても簡単だ。おもしろいからである。

前々から村上春樹の食物の描写はとてもおもしろいと思う。特にドーナツ好きというわけではないが、このドーナツにはとても魅かれる。

(玖保キリコ)

「父の帽子」森茉莉・エッセー 新潮社

この本のなかの「夢」。よむたびにことばのない思いのなかにおちこんでいるのに気づく。たよりない、時の羽音にさえぎられる影のような生活が、スライドのようにとまってくっきりした絵になって、そこでは空気も現実よりすこし澄んでいる。「この世界の明るさ、それはどうしてあるのだろう。」

あの戦争も「或冷たい冬の朝見たことのない国々」とはじまり、「きのうまで空間を切り開いて立ったり、歩いたりしていた人々はそのあった場所に空気の層を残して消え」、まるで光線銃だ。こどもの記憶とふしぎにびったりしている。どんな歴史の説明も、このように、いなくなつた人びとを、こわれやすい世界を気づかっただけはなかつた。

(高橋悠治)

「天国が降ってくる」 島田雅彦 福武書店

たいがいの本はうしろからよんでいくと、よくよめる。準備作業を読者におしつけずに、かきたいところからかきはじめればいいのに。この本も、ヒーローを説明するために祖父の代からはじまっているのはよけいだと思っただが、はじめからよんでしまった。

だが、うしろからよんだ方がいい本です。ことばにぎくしゃくひっかかるリズムがついてくるのがそのあたりなので、よんでいてきもちがいい。

そして思いだした。ゴンプロヴィッチが「神曲」はうまくない、そのうちかきなおしてやりたい、といっていたことがあった。かれはその前に、退屈のあまり死んでしまった。思いついたことは、すぐやった方がいい。

(高橋悠治)

「ラテンアメリカの小さな国」 ジョーン・デイデオ 晶文社

北アメリカ作家のエルサルバドル訪問記。数字やことばがあてにならず、知識や情報ではつかめない世界にほうりだされ、ガルシア・マルケスが伝説ではなく現実そのものだと思いはじめた。「雨がふると銃声がある。」

日々の恐怖にはなんの解決もありえない。論理や情報が、感じないですむための近道だという偉大な発見をした文明にとって、テロルと夜ごとのパーティが同居するサンサルバドルは、都市の近未来のイメージとしては「ブレードランナー」よりはっきりとある。

ベルファストが未来のロンドン、ペイリュートが未来のバリ、チェルノブイリが未来の東京であると想像しても、なんの実感もない。偉大な時代にいきわたるわけです。

(高橋悠治)

「ブルームービー」 ジョセフ・ハンセン 早川書房

これはホモ・セクシュアルの保険調査員デイヴ・ブランドステッターものシリーズ第五作。この本から私立探偵になるのだが、一冊ずつ、本人の環境が年毎に移り変る「現実感」がこの本の面白さ。それと共に、ホモ・セクシュアルというところ、とかく「変った人」と思いがちだし、現にそんな人も多いが、ハンセンの本に登場するのはそうではない。なによりも、ハードボイルドにありがちな「マツチョ」と「男性至上主義」がまったくない点がいい。

なにをかくそう。あまり「ほれ込みすぎて」、とうとう六作目を翻訳する羽目に陥った。シリーズは一作目から「闇に消える」「死はつぐないを求めろ」「トラブルメイカー」「誰もが怖れた男」、この本と続く。(田川律)

「八百万人の死にぎま」 ローレンス・ブロック 早川書房

同じ作者の「泥棒シリーズ」の方が有名だが、こちらはアル中の探偵が主人公。「限りなく下戸に近い上戸」のぼくとしては、まったく異次元に近いほどの話だが、アルコール以外なら、「中毒」になる気質も持ち合わせているだけに、主人公の悩みはよくわかる。現在のハードボイルドの傾向は、こうした主人公の性格描写に重点があるより、なにがなんでも「強い男」というのがいい、とまたなりつつある。

しかし、ぼくのまわりを見まわしたところ「悩み多い男」ばかり。どうしたって、そういうのにひかれてしまう。もちろん、人によったら小説は、事実と離れてるからこそ、という意見もあるが、ハードボイルドは、世相の鏡だけに、リアルな方が好きだ。(田川律)

「笑う警官」 マイ・シュールバルナペール・バール 角川文庫

「中毒」でいえば、ぼくはミステリーの「中毒」。警官モノでも、87分署からこのマルティン・ベックまで、ホントにいっぱい読んだ。黒人のふたり組「墓掘りマックと棺桶エド」のシリーズもなかなかだが、やっぱりこの夫婦のコンビで書いたシリーズが面白い。

これまたよく好みの、一作毎に「時が流れて」いくもので、こちらはハンセンよりもさらに克明に世の中の変化まで描かれている。それにトマス・チャステインの書く警官みたくにスーパー・コップやないし、ジョセフ・ウォンボの書くアメリカ西海岸の警官みたくに、うじゃじゃけてない。今、作者も主人公も思ひ出されませんが、インドの警官のシリーズ物は、なかなかかかったな。(田川律)

「タレイラン評伝」上・下 ダフ・クーパー 曾村保信訳 中公文庫

フランス革命、ナポレオン時代、王政復活のどの時期にもとりのこされず、殺されず、失脚しなかった外交家の話です。ダントンや、ロベスピエールや有能な人々のほとんどがその有能さのために生きのびることのできなかった時代に、あの人はなんだか、ずっと生きてたんだってこと、というので読みはじめた本です。

大した才能もなく、口ばかり達者とナポレオンにこきおろされ、何年も窓ぎわの人をやりつつけるこの外務大臣は、主人のナポレオン失脚後のウィーン会議で、ただちにフランスに徹底の有利な条件を勝ちとる口達者なので、二十年前の粒々辛苦のあげくに、やっとセント・ヘレナの孤島にたどりついた、と書かれるナポレオンの姿も、

この本の中ではまるで手にとるようによ身に近に見えます。ダフ・クーパの底意地の悪さと、タレイランの手腕、才気がしつかり出会った伝記です。訳もとってもうまいと思えました。

(三宅榛名)

「ラサリ・リョ・デ・トルメスの生涯」
作者不明 会田由訳 岩波文庫

ピカレスク小説からの一冊。さしてみづからをかえりみずに進行する小説の方法、小説の構造。主人公の冒険的人生も右に同じです。

貧乏としかいいようのない生まれつきのラーサロ少年が、けちんぼ坊主、すかんぴんの騎士などにつかえて、あれやこれやさんさんの苦勞のあげく、まあ最後に富み栄えて幸運という幸運の絶頂に立っていたのですと自分で言うところまでこぎつける、というだけ

の話です。

ためらいなく進む時間。どの場面も平氣にでたらめ。紙芝居世界の成り立ち。なにもかもが楽天的にスカスカ。以上のようなものだけから出来ている小説です。

(三宅榛名)

「チェーホフ全集」からの短編の数冊
神西清・池田健太郎訳 中央公論社

むかし愛読していた、今もときどき思いかえし、ときどき読みかえします。読みかえすと、やっぱりあきていっていることはなく、軽々と上出来の出来上りに単純に感心します。一瞬のひとことでそれまで書かれたすべてのこととがらが全く異なる世界としてひっくり返るといような場面とか、いちどきにその人の声を実際にきこえてくるような光景とかが、以前はとて好きでした。

(三宅榛名)

「岸田劉生」 富山秀男 岩波新書

岸田劉生の評伝。没後五〇年にあたる昭和五十四年には、国立近代美術館で回顧展が開かれ、それと同時に全集や画集が出版された。この本のあとがきによると東京の展覧会では二十万人ちかくの人が入場したそうだ。人の頭ごしに「麗子微笑」「切通しの写生」「自画像」などイライラしながら見たものだ。劉生の絵の中には、よく文字が書き入れている。デューラーやファン・アイク風アナクロ古興味なのだろうか。ところがなかなか単純でないことが劉生の言葉によってわかる。

「かくて美術の目的は結局現実を写すといふ事にはなくて、深い意味での装飾にある——写実は「道」であつて目的ではない。目的は写実以上の処にある。」

(平野甲賀)

「雑草のくらし—あき地の五年間—」
甲斐信枝 福音館

染物を始めてから「草」「木」「花」とついた本をついつい買ってしまう。

これは、そのうちの一冊。畑の一角を借りて(何坪だろうか?)五年間、雑草のおい繁るのに任せ、観察・写生した絵本です。同じ著者の絵本「ひがなばな」もいい。私の染物は「雑草染」と自分で呼んでいるのですが、染色方法、草木の選び方、全部自己流です。

もちろん、染色用の植物図鑑、染色家の実用書等はたくさん出ているのですが、あまりおもしろくありません。甲斐信枝さんの一連の雑草の絵本、渡辺一枝さんの「自転車いっばい花かごにして」(情報センター出版局)などは私にとって、とても役に立つ実用書です。

春から夏にかけて、家から自転車で

ける所は、草とり、花摘みに、毎日走っています。始めて出会った花は、花が散り、草が枯れ、次の年の芽吹きまで見送ってから、染草にします。明日は、ドクダミを集めて、染めてみようかと思っています。臭いも強く、何処にでもハビコルので、あまり人気のない草です、もっとも薬草としては昔から知られています。干してから煎じて飲めば、毒消しの効用あり。

(平野公子)

Labor of Love, Labor of Sorrow:
Black Women, Work and the Family
from Slavery to the Present.
Jacqueline Jones, Basic Books, 1985.

北アメリカの女性の歴史学者ジャックリン・ジョーンズが、北アメリカの黒人女性の労働史を書いた。黒人女性の労働史を記すことは、とりもなお

さず黒人の家族の絆の性格を描きだすことにもなった。アメリカ社会の究極的な底辺であった黒人女性は、ずっと苛酷な労働によって家族を養うことを要求されてきたし、またその責任を引き受けて生きてきた。彼女らはこの三百年のあいだ、労働することで、肉親の絆、家族の絆をまろうとたたかってきた。三百年の持続。彼女らの生をその労働の歴史から眺めれば、命をかけた労働が肉親と共同体に対する愛を基盤にしていたことがわかるし、そのために彼女らは悲しみの労働にたえてきたこともわかる。そして、そういう彼女らの三百年の生の軌跡を通して、アフリカ系アメリカ人の独自の文化の断面が見えてくる。そればかりか、白人はもとより、黒人男性によってすら共有されていない、黒人女性だけのサブカルチャーも見えてくるのである。女性史に、またその方法について興味

を持つ者たちにとって役に立つ本。
(藤本和子)

Roll Jordan, Roll: The World the Slaves Made. Eugene Genovese. Random House, 1974.

アフリカ系アメリカ人が奴隷として労役をさせられていた時代、彼らほどのような思想にもとづいて、人間としての尊厳をまもろうとしたのか。そのことを調べているうちに、ジノヴィージーは、圧迫する目的でおしつけられた考えに対して、黒人はみずからきわめて自立的な解釈をおこなうことで、もっとも苛酷な状況においても、人間としての威厳を手放さずに生きのびる方法をさがそうとした、という事実にきがついた。そのようにすることで、奴隷の身分に貶められていた者たちは、結局アメリカの文化全体をとほうもな

く豊かにするとともに、ひとつの独立した黒人民族文化をつくる基礎をきずいたのもあった。抑圧される少数者の集団の倫理的な優越の意味、そして被抑圧者の集団の自立的な思想の力について考えるのに役にたつ本でもある。
(藤本和子)

Black Culture and the Black Consciousness: Afro-American Folk Thought from Slavery to Freedom. Lawrence Levine. Oxford University Press, 1977.

現代のアメリカの黒人女性の文学を讀んでみても、あるいは黒人女性の話をきくために歩きまわったりしてみても、作家個人や話をきかせてくれるひとりひとりの特質や個性のむこうに、いつも集団的な特質と個性をうかがうことができる。たとえば、書くことや

話すことを仕事にしてはいない女たちが語るといふ行為のなかで示してくるあざやかな言語表現の背後には、底の深い言語的表現の伝統を感じることができるとだ。このレヴィーンの本は黒人のさまざまな表現の伝統的な背景を示してくれる。その思想的な背景を示してくれる。
(藤本和子)

Exodus and Revolution. Michael Maltzer. Basic Books, 1985.

マイケル・ウォルツァーは旧約聖書の「出エジプト記」を歴史で最初の革命の記録として読んでみたのだ。そのとき、彼の注意をひいたのは、「出エジプト」革命で、神がなにをしたかというよりも、人々が自分たちの解放のためになにをしたかということだった。「出エジプト記」はそれを記録した。それだからこそ、イスラエル人

のエジプトからの脱出(奴隷の身分からの解放)の物語は、西欧の政治革命の思想に大きな影響をおよぼしてきたのだ、と彼は考えたし、またその影響を例証してみせることもできた。南アメリカではじまった解放の神学と「出エジプト記」の関係に対する考察など、さまざまな示唆にとみ、参考になる。
(藤本和子)

Gorilla, My Love. Toni Cade Bambara. Random House.

バンバールの最初の短編集。彼女を贖罪にしている人に。「ゴリラ、わが愛」とは、何ともすばらしい題。(藤本)

「シングル・ライフ」 海老坂武
中央公論社

男が四十歳をすぎて一人で暮らしてい

ると、からかいや道徳的糾弾の対象となることを日常的に覚悟しなければならぬ。

最近の例でいえば、斉藤晴彦が芸能界に顔をだした途端に、しつこいからかいのタネにされた。かれはちょっととまどったかに見えたが、すぐに、つめたい顔でそのからかいをはぐらかすようになった。そういう戦法をえらぶことに決めたらしい。

もう一人の知人である海老坂武は、ながいこと「なしくずし未婚」をつづけてきて、「四十も半ば近くなってきたら、ようやくにして覚悟ができてきた」という。「結婚なんてくだらない」と「自信をもって」いいきる覚悟がきまって、かれはこの本を書いた。「なしくずし未婚」をやめて、いわば自覚的な「未婚」にふみきった——それが四十年代半ばだったというあたりに、息づまるようなリアリティが感じられ

る。すくなくとも数年おくられて海老坂さんのあとを歩む私にとっては、たぶん私の「未婚」論は、かれのよりに劇的なかたちはとらないだろう。それだけに面白く読んだ。(津野)

「鴨長明——閑居の人」 三木紀人
新典社

「方丈記」の前半は天災と人災の、後半は「閑居」生活の記述である。高度成長期をはさんで、「方丈記」論の重点は前半から後半にうつった。地味な国文学者たちも、けっこう露骨なのだ。この本は後半派の代表である。

長明は移動できる仮設住宅に、折りたたみ可能な琴と琵琶、好みの経典などをそなえて生きた。シングル・ライフはシングル・ライフであるほかない。そのことを「自信をもって」再確認した。わびしさとともに。(津野海太郎)

「ぼくたちの好きな戦争」 小林信彦
新潮社

去年、私は「物語・日本人の占領」という本のなかで、戦前のフィリピン芸能界を席巻していた奇体なアメリカニズムのスケッチをこころみだ。すぐに小林さんが電話をくれて、日本だって同じことだったんですよとおしえてくれた。この小説は、その日本におけるアメリカニズム発生史という側面をもつ。脱亜入欧などはインテリのお話——大衆文化はいまもむかしも脱亜入米だった。マニラの劇場にあったものは、すべて東京の劇場にもあったのである。

浅草のステージ・ショーの芸人が、鼻の下に消炭でヒゲを描き、グルーチョ・マルクスの扮装でアメリカ軍に投降する。もちろん例のアヒル歩きで。すばらしく屈辱的な光景だ。(津野)

「クリスマスのおすすめ」 くぼた尚子
白泉社 花とゆめCOMICS

「私、妹尾聖子17歳。作家のママ——藍子さんと二人暮らし。ママって家事はダメだし、ヒステリーはすぐ起こすし……ほんと、どっちが養ってらんだかわかんないヨ……」という、過激な母と娘のおはなし。藍子さんは、われわれの世代がどのような「母親」になっただか、あるいはどのような「母親」になれなかったのかということをしめすひとつの極端な例ではないかとおもう。なにしろ平気で「ばかーっ、あんななにか苦労して育てるんじゃなかった、あたしの青春をかえしてよーっ」なんてわめくんだから。でも、「あたしがもっといい小説かいてもっといい母親になったらあんなあたしのこともっと好きになってくれる？」という母に、「ダメ。これ以上好きになれないもん」

「ロルカ・ドリ——裏切られた友情」
A・ロドリゴ 六興出版

ドリが親友のロルカを故郷のカタルーニャに招く。移動するお祭りみたいな青年だったロルカは、友人やその家族、近所の漁師や子どもたちとのつきあいを、そのまま「たのしい芸術」にかえてしまう。

耳できいただけのロルカの詩を、その人々がきそって暗記する。「私の詩は出版されて決定的に死ぬのだ」

ドリは絵でさえ人々とのつきあいを必要とした。「これなんに見える？」と漁師に自分の絵を見せる。「海さ。でも本物の海よりいいよ。波がかざえられるから」——だが、まもなくドリはこうしたすべてを捨てて、現代芸術のお化粧になってしまう。

デイドロの社交か、ルソウの過激か。なかなか決着はつかない。(津野)

と娘。少女マンガの日常は現実よりもはるかにすすんでいる。(八巻美恵)

「切られた首」 アイリス・マードック
ク 新潮社

小説みたいないないくつなものをじっくりとたのしみをもって読むのはひとつの才能である、と小説嫌いの者たちにいわれつつづけている、その才能は、この小説を読んで花ひらいたのではないかと思うほど、はじめて読んだ十代のおわりには衝撃だった。せまい人間関係のなかの複雑に入り組んだ愛の様相は、ミステリーなんかよりずっとおそろしい。スキヤンダラスな物語なので自分がよってたっているわずかな部分まで一瞬のうちにすぎたおされてしまふいそうになったりもするけれど、結果としては昇華されるのが、婦人雑誌の手記とはちがうところ。(八巻美恵)

「ガルシア・ロルカの死」 ビラ・サン・ファン 彩流社

一九三六年八月、ドリはパリでロルカ暗殺の報にせつした。「死んだ友人のことを考えながら食うと、イワシの味が一層うまくなる。とくに銃殺か殉教のばあい最高だ」——おそまきながらこの挑発にのって、もう一冊、新しいロルカものを読んだ。

ロルカ暗殺の謎にせまる著作としては、すでにイギリス人イアン・ギブスの「ロルカ／スペインの死」がある。おなじことをスペイン人としてはじめてやったのが、この本である。

フランコ時代、ロルカの存在は徹底的に消し去られていた。かれの詩は少数の人々のあいだで、印刷ではなく口伝によって保存された。そのような仕方、かれの詩は「出版による死」から蘇ることができた。(津野海太郎)

「私は本当に私なのか 自己論講義」
木村敏+金井美恵子 朝日出版社

なんととってもこの題名がいい。題名と小見出しの魅力だけで買った本。たとえば——この瞬間の自分が失われていく・誰かの夢の中の私・脳みそがサラサラ流れる・自分が自分にとって一人の他人である・文体が変わるといふこと・差異自身が差異を差異化する・個別的他者の背後の他性一般・「私は私である」とはどういうことか・歴史的差異の統合としての私・自己性は自己の内部には存在しない・鏡の前の指揮者・苦痛としての巨大な空虚・「いる」ことの障害・何重にも重なっている時間・ふとここに居ることの根拠・「すでに書かれている」小説・書いた言葉ではなく、書き方がある・などなど。ね。わたしはつられて木村敏氏の著作を四冊も読んだ。(八巻美恵)

水牛かたより 情報

●「大國ニッポンの退廃」 鎌田慧
すずさわ書房

雑誌「教育評論」に連載したものを
中心に集めた本。なぜか、水牛楽団や
水牛通信も登場する。

「学校は工場になった」という鎌田
さんの意見を、さまざまな教育現場の
ドキュメントで綴っているのが、前半
の内容。学校の中でどんどん強化され
ていく管理体制の実態は、あちこちで
耳にする「この頃の学校は——」の意
見から推測するよりはるかにひどい。

後半は、「どぶろく」から「国鉄民
営化」、映画から活字にいたるまで、
エッセイの幅は広がり、今日の文化状
況に「希望」でなく「絶望」を指摘す
る。でも、鎌田さんは、短いものより

長いものの方が読みごたえがあって、
ここに出てくるテーマのそれぞれの、
「長編」が読みたいと思った。(田川)

●「歩く書物」 津野海太郎 リプロ
ポート 一三〇〇円

津野海太郎の本と編集についての本
としては、「小さなメディアの必要」
につぐ2冊目。よみながら、津野海太
郎についてかんがえた。

ことばと機械(道具といたいいたいだろ
うが)と人間ずきの少年。これは独身
者のつよみだな。「水牛通信」をつく
りながらつくりあげた活動のスタイル。
これもまねできない。思いいれにおぼ
れたがらないスタイルリスト。「本とい
うものに過度に劇的にのめりこまずに、
ごくあたりまえに本とつきあうスタイ
ルでとおしていきたい。」なんちゃっ
て。でも、本にかぎらず、すべてにそ
うしたい。それじゃ、さよなら、とあ

ともふりかえらず、すたすたと、なん
てね。どうだ、やってみたいだろう。
かれの編集は、見る目ではなく、か
んがえる手としての本をつくる。本づ
くり以外にも応用がきく技術。(高橋)

●「平野甲賀(装丁)術」(仮題)
平野甲賀 晶文社

いま「日常術」というシリーズを準
備している。その第一回配本として七
月半ばにできる予定。

小野二郎著作集の装丁と造本の過程
を追いながら、かれのブック・デザイ
ンについての考え方をたどっていくと
いう筋で、実況中継的な現場の語りが
中心になる。水牛通信でやってきたテ
ィプおこしの方法と技術を大いに利用
させてもらった。

本のデザインを自分の生活デザイン
の一部に組み替えていく。ただしプリ
ントゴッコにおいてさえ、あるいはプ

リントゴッコだからこそ、自分の専門
的な技術にこだわらざるをえない。革
命のうちなる反革命! なぜ平野先生
が釣に熱中するのかという理由が、ほ
んのすこしだけ分った。(津野)

●「アフター・アポカリプス」 D・
グッドマン コーネル大学出版部

かれは日本の新劇を演劇世俗化の運
動としてとらえる。方法上のリアリズ
ム志向はその一部分である。

だが、この運動は原爆という大きな
集団的经验をとらえることに失敗した。
そのことの中に、六〇年代に始まる
新劇批判が準備されていたという仮説
を証明すべく、かれは原爆をモチーフ
とする四戯曲、堀田清美「島」、田中
千禾夫「マリアの首」、別役美「象」、
佐藤信「鼠小僧次郎吉」を翻訳し、そ
れぞれに長い序文をつけた。
いわゆるアンテグラ演劇の経験をバネ

に、日本の近代演劇史を読みかえると
いうところは、小生もふくめて、だ
れもやってこなかった。退屈な仕事の
ような気がしていたのだ。それにかれ
がはじめて手をつけた。おくれをとっ
た。いそいであとを追う。(津野)

●「ブルースだっただけの唄 黒人女
性のマニフェスト」 藤本和子 朝日
新聞社 朝日選書 一〇〇〇円

たとえば「牢獄は出たけれど、わた
しの中の牢獄をまだ追い出すことがで
きない」というウィルマ・ルシル・ア
ンダーソンの物語、彼女が自分史を語
るのを読むと、共通点があるというわ
けではないのに、わたし自身の遠い記
憶がゆらゆらとたちのぼってくるのが
ふしぎだ。どうして? とわたしはか
んがえつつづけている。この本は完結し
ない。しかも実用書の役目もある。な
ぜなら、他者と向き合う具体的な方法

をまなべる。「他者の固有性と異質性
のなかに、わたしたちを撃ち、刺しつ
らぬくものを見ること」。読むと元氣
がでる。安くてしかも役に立つ、これ
が書物というものです。(八巻)

●「シニカル・ヒステリー・アワー④」
玖保キリコ 白泉社 花とゆめCOM
ICS

7月17日発売予定の、ごぞんじ「シ
ニカル」です。いとしのツネコもキリ
コもツネコもみな健在で、いじわるや
なかよしや、哲学などもやっています。
ツネコ型ロボットのはなしもありまし
たっけ。マンガの単行本は、書きおろ
しではなく、一度雑誌に掲載されたも
のをあつめて作るという方式なので、
出版される前でも、このように中味が
わかっていて、それでも買うんだと待
っている。これが正しいファンという
ものです。(八巻)

キリコのヨリ クツ 玖保キリコ

最近、悲しい怒りを体験したので、
それを書くことにする。

私は常々、

「漫画家には保障がない。ということ
は漫画家には未来がない。ないという
ことを言い切ることができないかもし

れないから、未来が怪しいと言ってお
いた方がいいかもしれない。とにかく
少しでも貯金をしておいた方が良い」
と考えていたので、先日、時間を作っ
て銀行に行った。

いつものように、リュックサックを
背負って出かけていったのであった。
このリュックサックというのが話の
ポイントである。

銀行で、手続きを済ませ、お金を預
け、ほっと一息ついてさあ帰ろうとい
うとき、手続きをしてくれた女子行員
が、大きな袋を手にして私の方に近づ
いてきた。

いやな予感がしたのだ。

その袋がどういう意味を持っている
のか意識する以前に漠然といやな予感
があった。

そして、悲しいことにそれは的中し
たのだ。

彼女はにっこりと微笑むと、私にそ

の大きな袋を差し出し、こう言った。
「どうもありがとうございました。こ
れは粗品です」

大きな袋の中には大きな箱が入って
いた。

私はひきつる笑顔でそれを受け取り
ながらも、頭にかーっと血が昇ってい
くのを感じた。

粗品？ 粗品だとー？ 私はこれか
ら打ち合わせに行くんだぞー。マンガ
買って家に帰るんじゃないんだぞ。一
体、銀行の間間は、銀行に来た人は、
銀行に来たらすぐに家に帰るとでも思
ってるのか？ 銀行に寄って、出かけ
ていくという人のことを考えてるのか
？ こんなの、こんなかさばる物くれや
がって。しかも、いかにも預金しまし
たっていう感じの「預金は〇〇銀行へ」
なんていう文字が大きくでーんと書い
てある袋にいられて。袋、捨てちゃおう

かしら。おわっ。箱にも書いてある。

どーしようもないな。これじゃ「私は
預金しました。おまけに今、通帳と判
子も持ってるのよん。ひったくったら
お得意よ」と言っ歩いてるようなも
のではないか。リュックサックにも入
りゃしない。こんなかさばるもの。私
はリュックサックなんだぞ。おしゃれ
な小ちゃいバックか何かを持ってる人
はどーすりゃいいんだ。大きいから困
ってもんじゃない。大きいから困る
ってものも世の中にはあるんだ。小さ
いけれど実用的なテレフォンカードで
もくれりゃいいのにっ。っ返してや
るっ。こんなもん。

もちろん、気の小さい私は、その粗
品を彼女につき返すこともできず、心
とは裏腹に「どーもっ」と笑って銀行
を出た。

弱い私。

私は銀行から駅までの道のりを、自
分をなだめながら歩いていった。

「冷静に。冷静に」

そうでもしないと、逆上したもう一
人の私がこのかさばる袋をゴミ箱にた
たき込むのを押さえることができな
かったからだ。

でも、捨てるのは良くない。

人の手がかかっているのだから。

使用せずに捨てるのは、作った人に
対する冒瀆だ。

私は駅に着いてから、この「荷物」
にどう対処するか考えることにした。
その間、さぞかし私はむっとした顔
をしていたことだろう。

とにかく、このままでは絶対に、こ
れはリュックサックの中に入らない。
やはり、バラにしなければならぬ。

私は、袋を捨て、箱を捨てた。

箱の中味を点検すると、タオル、ポ

ケットティッシュ、箱に入ったティッ
シュペーパー、そして、サランラップ
が入っていた。

タオルとポケットティッシュと箱入
りティッシュは、どうにかリュックサ
ックの中に入った。

しかし、縦にしても横にしても斜め
にしても、サランラップは私のリュッ
クサックの中に美しく収まってはくれ
なかった。

いったん静まったかのように見えた

怒りが、また燃え上った。

どうして、バラにしてもまだかさば
るものをくいださるのだっ！

電車が来たので、とりあえず、リュ
ックサックからつき出る形で、サラン
ラップをリュックサックにつっ込み、
私はいらいらと電車に乗った。

この銀行は私に恨みでもあるのだら
うか。私にこんな仕打ちをするなんて。
私は預金をしたのに。

黒姫山



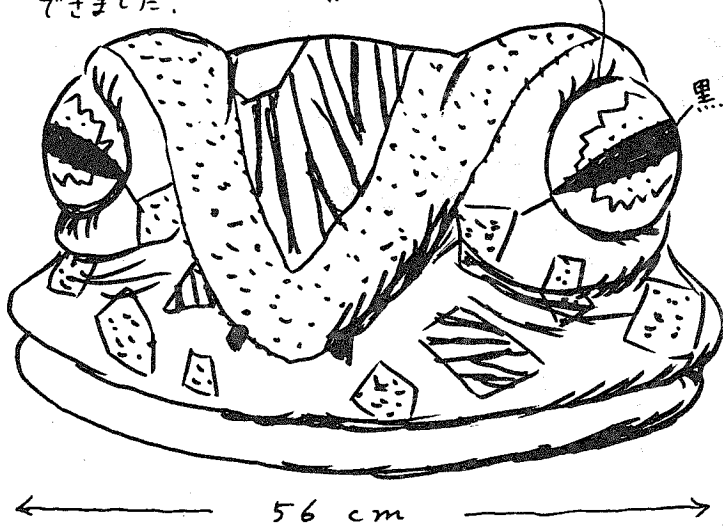
矢川澄子さんの家

綿を布でくるんだ
そのふよふよぐあいが
とてもかえるらしく
できました。

かえるの頭

表面は生成りのシーチングで
くるんで、緑がかったグレー地に
黒いプリント模様の布を
アップリケ

目玉は黄色地に
青いプリント模様の布
黒いリボンでふちど



かえるの頭を持って 黒姫行き 柳生まち子

いわれたとおりの切符は前日に用意して、さて新宿駅へ行ってみたら乗るべき列車はなかった。「これは上野駅だよ」 なんとということ！
かえるの頭を持つての黒姫行きが心細くて、八巻美恵さんに同行をたのんだのに、その美恵さんは上野駅のホームで私をさがしているのだ。この私という人は、自分の家からつれて行ってもらわなくてはどこにも行けない人だったのか！
忙しい美恵さんの時間をぎりぎりにとつての計画だったから、彼女は行かないことになってしまった。黒姫行きの列車は少ないから、一泊だけの彼女が明るいうちには行きつけないからだとどうとう私は泣きながら一人で行くことになってしまったけど、それは当然の罰だ。美恵さんに行くという楽しみを自分でぶちこわしてしまっただから。

電車が大泉学園から池袋に向かう間私は様々な工夫を試してみたが、どうしても、このサララップは、不安定な収まりのままだった。
私はどうとうあきらめ、不格好なサララップをリュックサックからつき出したまま歩いていったのだが、財布を出し入れするたびに、メモ帳を出し入れするたびに、ハンカチを出し入れするたびに、この邪魔なサララップとそれを私にくれた銀行に対する呪いの言葉が心の中に渦巻くのであった。

打ち合わせの相手の編集者に会った途端、私はその不満をすべて彼にぶつけて、銀行はかくかくしかじかこうあるべきだとわめき散らし、一応スッキリした後、
「奥さんへのおみやげにどうぞ」と、そのサララップをプレゼントし

た。

彼は非常に迷惑そうに、「いいんですか？ 悪いですよ」と遠慮していたが、

「私のリュックサックにそのサララップは入らないが、そちらのバックはサララップが充分入る大きさである」という私の一方的な説明で、しぶしぶとサララップを自分のカバンにしまった。

諸悪の根源は私から去っていった。めでたい。めでたい。

私は、自分がそういう物を捨てるのには抵抗があるが、他人が捨てるのは別に構わない。

だから、彼がそれを捨てたって全く平気だ。

自分の手元にそれがなければいいのだ。すっかり心が軽くなってるんるんしている私を編集氏はあきれたように眺

めていたに違いない。

それにしても、人に物をもらって、これほど怒り狂う人間というのは、かなりわがままな性格に違いない、と何だか悲しくなってしまう。

どうして、物をもらってこんな悲しい思いをしなければならないのだ。
ああ、また怒りの炎がメラメラと燃え上ってくる。
もうやめよう。

しかし、わがままな人間は私だけではない。

私の知人は、中国ファンドをしたらコアラの人形をもらって、やはり怒り狂ったそうである。
ほっとした。

すっかりかえるになったニコルさんは
ギターをひきながら、自分で作った歌
「Timothy Jenkins - めまどろぼうず」
を歌いました。
—沼のそばに住む Timothy Jenkin が
丸太に座って考えていたら、かえるが
やってきてその場所をとりあげてしまい
座りたいなら、このヒザに座りなっ
ていいのです。イヤだよ、おしりがびしょ
びしょになってしまうから……

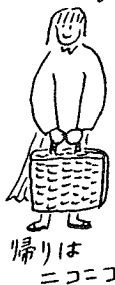
かえるのニコルさん



Ribbit
Ribbit

楽しかった黒姫行きのおみやげは
山歩きのとときどき

ドイツウエの まつぼっくり
スミレの株



うさぎのうんこ

枯草色 1cm くらい
おかしみたにいかゆい
うさぎのうんこという
見せたのに、食べられるの？
マいた人がいる。

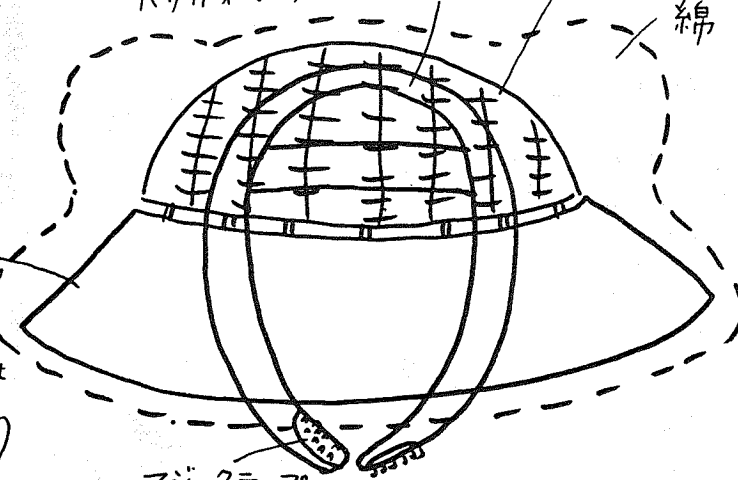
帰りは
ニコニコ

かえるの頭の内部構造

大きなしっぽが
はいているの



発泡スチロールの板を
ハリガネでザルにとめつけてある



発泡スチロール
の板

綿

うさぎの澄子さんは
ルバーブのパイや
木の実のケーキ
などをとま
じょうずと
作ります



マジックテープ
あごのところでとめる

お庭に
野の花を
たくさん
持っています



チゴユリ



ニンソク



ホタルカズラ

大きなビニール袋に
入れたかえるの頭



・しょんぼり 乗りかえの
列車をまつ

ぼを作ったあげて、それで澄子さんは
もったりばにうさぎになれたわけ
で矢川さんは「兎とよばれた女」という
本を書くくらい、うさぎなのでした。
その次は、子供の本に12ヶ月の連載
用に「うさぎのしっぽのお話」を作っ
たこと。
そしてその次がこんどのかえるの頭。
矢川さんの住む黒姫のお隣さんのニコ
ルさんという人が、ボクもかえるにな
って歌いたいなあといっているとい
うので、おもしろそうだから作ってみ
ようかなという気になって、そしてまさ
に啓蟄の頃、かえるの頭はできあがり
前から行きたいと思っていた黒姫だか
ら、かえるの頭を持って黒姫行きとい
う楽しみを計画したってこと。
これでおもしろいかもしれないし、ま
ただれかおもしろいおもしろいときをし
たら、このお楽しみはつながっていく
かもしれないね。

とにかく私にとっては、かえるの頭
を持つての黒姫行きの楽しみは、ある
時から始まったつきつきとながった
楽しみの、そのつづきの楽しみなのだ
から、めげないで行かなくては。
84年10月の水牛コンサートで、なん
だかよくわからないけどうさぎの頭が
いるという注文をもらって、頭にかぶ
れるうさぎの頭を作ったのが始まり。
そんなものを作るのは初めてだっ
けど、やったことないことをするのは
とても好き。そういうことをやってい
る自分自身のことを楽しめる。
矢川澄子さんがうさぎになって「う
さぎのスウプ」などを歌って、みんな
もおもしろがってくれた。と思うよ。
そしてうさぎの頭は矢川さんと一緒
に黒姫に。
それからしばらくして、やっぱりう
さぎのしっぽも欲しいという注文が矢
川さんからきて、頭と同じ布製のしっ

料理がすべて 田川律

〈トリのレモン煮〉

これは、ほんとはこの欄に再登場したのかも知れない。だんだん暑くなってきたので、さっぱりしたものをも、と思って、ある日作った。というのは表向きで、ホンマは、斉藤晴彦さんが出た「料理番組」から依頼があつて、ついつい出ることになつて、何をしようかと考えてたら「夏向きに——」といわれてこれを選んだので予行演習（な）んで、コワイ字や、よう考えたら）に作つた。

トリの胸肉を皮つきのまま、ひとり一枚見当で用意する。ニンニクとショウガをテキトウにすりおろして、この肉にすりこみ、白ワインをたっぷり注

ぐ。コショウとゲッケイ樹の葉も入れ塩味をつける。そこへ、ネギをざっくり切り、生椎茸をテキトウに切つて加え、約三十分ほど置く。時々、かきまわす。深鍋に油とバターを入れ、まずト리를皮の側から、色がつくまで焼く。「魚頭鶏皮」というヤツだ。それからひっくりかえし、おおむね、火が通つたら、ネギ、椎茸、ワインの漬け味をここへ入れる。そこでレモンを扇形に切つたもの、肉一枚につき四分の一個分ほど入れ（多すぎると苦味が出る）十分間ほど煮る。

テレビ局の人。「テキトウ、というのはどのぐらいですか？ これは冷やして食べてもおいしいのじゃありません」。それは考えてもみんかった。だけど今回もまた、できたてを食べた。

〈いり豆腐〉

いつも作る「麦り冷奴」の変形を、学芸大学のスナックで出してくれたの

でマネした。ようするに、豆腐をいためるところがちよいと違うだけ。それと上からかける具にトマトのみじん切りを加える。そうすると酸味がほど良い味になる。ただし、じっさいやってみたら、豆腐がすぐ崩れる。自由ヶ丘東急のニガリ入り木綿豆腐なら、しっかり固いからええかもしらん。今回使つたのは渋谷東急の普通の木綿豆腐。

〈ナスの油炊めと、レバとコンニャクのいり煮〉

これもまた、再登場かな。最近どっかの中華料理店のカウンターで見ていたか、モノノ本で読んだか。ニンニクを炊める時に、ネギもミジン切りにして炊めると、また違う味と香りが出るこことがわかつて、この頃は、ナントカノヒトツオボエ、ですぐこれをする。ナスの油炊めに、なんでニンニクを使うのか。人によつたら邪道と思われるだろうが、これはひとえにニンニクが好

きだから。そこへナスを輪切りにしてたっぷり油を加え、しんなりしてきたら、紹興酒と砂糖を加え、また少し炊めてショウ油を加える。だいたい関西では、すき焼でも、まず油を引いて、肉を並べ、その上にまっ先に砂糖をかける。それからモロモロの野菜を入れて、酒やしょう油をたして煮る。さしずめ「先砂糖、後醤油」だ。

レバはトリのレバ。これまたはじめにニンニク・ネギをゴマ油で炊めて、そこへコンニャクを入れて、しばらく炊めてから、レバをたした。どうも順序が逆、という気がしないでもなかったが、まあ、ええわ。そこへ紹興酒を加え、レバに火が通つた頃ショウ油を加え、タカノツメのみじん切りをふりかけて、しばらく煮込む。

このふたつを、かわりばんこに食べる。片方は甘辛く、片方は辛い。ところが。ナスの方が少々甘すぎた。その

上、どちらも同じ量ずつ残つた。季節はもうそろそろ暑くなり、残り物がすぐ悪くなる時期。「ほなら、この両方をいっしょにしてもたらさないや」とばかり、この二種のを混ぜ合わせて温め直した。それを、例のヨーガ教室へ持っていくって全員で食べた。

〈米とソバ〉

日教組の教研集会で、二年続きで出会つた同じ分科会の長野・諏訪の矢島先生が、米とソバを送つてくださった。ソバは、学校のこどもたちと育てたソバをもとに作つたもので、米は矢島さんの実家で作つたものだという。

米はちよつと変つていた、と書くのも変だが、一回目炊いて食べると普通だが、それが残つて冷えた時、おかゆ

などになると、粘り気がその辺のスパーで買う米と違う気がする。思わす昔は糊といえは、ご飯粒を使つていたのを思い出した。手紙の封筒を貼る時も、お釜の中のご飯粒を使つたものだ。あれは戦後一時配給された奇妙な「いり米」というか、一度いってある米では、ゼツタイ出来なかつた。すかさずかで量は多いのだ。もちろん粘り気なんかない。

ソバも腰が強くておいしかった。信州のソバの中には、ソバ粉だけで、今にもポロポロになりそうな真黒なヤツもあり、人によっては「これこそソバ」という人もいる。ぼくは、どっちかといえは、もうちよつと腰がある、今回もらったようなのがおいしい。なかにはラーメンのメンみたいなソバもあるが、あれはもひとつやな。そういうえば橋本國彦が作つたソバの花をうたつた曲をいつもうたう友だちがいた。

総理大臣への プレゼント 鎌田慧

読み捨ててしまった夕刊だから、いまさら探すのは大変なのだが、五月下旬のある日、中曽根首相の誕生日だったとか。いまや天皇なみに首相の誕生日も記事になるんだな。

目出度くも、無惨になった頭部を、野球帽のようなゴルフ帽のようなもので覆い、加山雄三のようなつくり笑いをしている写真が掲載されている。その帽子がニュースらしく、つばの上に張りつけられたWのワッペンが、首相

の野望である「ダブル選挙」のお祝いで、中曽根担当の三人の女性記者が、その贈り主とか。

首相と新聞記者は、あたかもクラスメートのごとく、お誕生日のプレゼントごっこをやっているらしい。それが恥し気もなく、大新聞のニュースになるんだから。まして、ダブル選挙は、二院制度のなし崩しとの批判が強く、自民党内でさえ異論があるというのに新聞記者が率先してWサインを送っている。こりゃ、もう駄目だ。

記者たちが贈ったのは、クダンの帽子のほかに艦輪がある。こっちの方は、その日が「海軍記念日」とかで、もと海軍将校にして防衛庁長官、「不沈空母」や「二〇三高地」など、戦争用語を乱用するウルトラクソンの歓心を買うプレゼントだが、カジまで与えているんだから。贈るほうも贈るほうだが、記事を書くバカ、載せるバカ、新聞記

者には、もはやこのうるわしい関係にギモンをもつものはいないのだろうか。三紙ともにおなじ写真を載せていた。新聞記者は自作自演、記者がやらせているんだから省力化だ。余談になるが、タネといえば、天皇誕生日にむけたチョーチン紙面を飾ったのは、敗戦直後、天皇が息子に書き送った手紙だった。

そこには、終戦の決断は、「国民のタネ」を残すためだった、ときわめて即物的に書かれていた。さすが「万世一系」の保持がお仕事の方らしい発想だ。お陰さまで、小生も子どもとの親となっているわけだが、あの戦争は、大東亜共栄圏に日本人のタネを播く狙いだったことがよくわかる。

それでも結局、人類皆兄弟のタネ播き競争に負けてしまったのだ。子どももつくれず死んでしまった若い兵隊の軀殻は、東南アジアのあちこちに必要

以上に播き散らされたタネで埋め合せになるのであろうか。

さいきん、新聞社のあいだで激しくなったのが「マチダネ」競争。これは天皇お得意の植物学上の学術用語ではない。たんなる業界用語で、巷のこまかなニュースを指す。たとえば、幼稚園の運動会とか小学生の展覧会、演奏会の記事である。たいがい、「黄色い声援」「熱心な観客の姿」「万雷の拍手」などのキマリ文句で色がつけられる。あとは社内報なみに市民の誕生、死亡の名簿が掲載され、「一生に一度はうちの新聞にお名前が載ります」との地元密着サービスとなる。

どれもこれも、政府広報の似たりよつたりの紙面になってしまえば、あとはサービス競争だけ。毛の薄い首相に帽子を配ればリッパな記事になるが、一般家庭に洗剤やバケツや柱時計を配

って歩くのは記事にならない。それとてにかく名前を並べて記事にする作戦にしたのである。新聞社系週刊誌の、「有名大学入学者速報」など、有名高校、有名中学、有名小学校の宣伝と競争をあおりたて、教育をカネ儲けにしている元凶だが、新聞の名前集め競争は記者たちを忙殺している。「もうすこしマシな記事はできないの？」

記者たちはたいがいこう答える。「そう思うんですが、とにかく忙しくして」

新聞が政府の拡声器となってしまったこともあってか、さいきんの政治の退廃はすさまじい。

文部大臣の海部俊樹などは、二十九歳から二十五年も衆議院議員やってきて、議事堂に肖像画が掲げられる、あこがれの「掲額議員」となった。その祝賀会で「こんどは銅像だ」といった

とか。あと二十五年も議員をやるつもりのような。どうしたことか列席していた社会党の武藤副委員長がカンパイの音頭をとって、「二一世紀の連合政権のときの総理大臣のために」とヨイショ。

野党第一党の最高幹部、あと二十五年は自民党の首相がつづくと思いいているのだから、もはや救いがたい。

と、まあ、今月は思いがけなくも政治について書いてしまった。中曽根の退陣がちかづいたせいかもしれない。彼が首相に就任したあと、わたしは彼から配達証明付きで「抗議文」を送りつけられている。四年たっても催促なしたが、返事をだす権利はまだ残っているはずだ。

さて、なにを送りつけようか。

「カフカ」

ノート

高橋悠治

(まだつくってない「カフカ」、そのためのノート、そのためにつかえないノート、しんきろうみたいたいな作品)

ザウミ。ことばをこえることば。こころをこえることば(フレイブニコフ「牛のモーミたいかんたんことば」(マヤコフスキー)。

リズムをつくるのは母音のうたではない。子音はノイズ。音がちかづく。意味ははなれる。

にたかたちをくくりつけて、まくらことば。ものはたとえにかわる。する

と、空間は時間にかわる。目は耳にかわる。うごきが人間になった。

ひっかかった音、かすれた音、しわがれた音、たよらない音。ひとつきでひっくりかえった音色。かきみだしてやろう。

昼間は役所でじっと、さなぎさながら。夕方。詩人の影が地上をはいのびる。アレクサンドリアのコンスタンティノス・カヴァフィス。プラハのフランツ・カフカ。かれらのへやから暗闇がながれだしただよった。

きかいと動物、人間とことばがなかくくくくした流刑の森。

だれかによばれている。名前をくりかえしくりかえしよんでいる。リズムがめざめた。音がおきあがる。

音は——たたく、くりかえしたたく。それとも、はずれ。これが第1段階。

第2は、つづく。とまる。それから、うつる。

第3段階、くねくねながい線。階段をころげまわることも。くたくたのリズムから力がぬける。

かたちは——しっかり、しるし。それとも、おもいで。

関係は——つけるか。かわりばんこか。べつべつか。

見えない映画のサウンドトラック。23分以内(46分カセットの片面)。1分から3分の断片のじゅずつなぎ。音色と身振りのマトリックス。

ポップ・ミュージックのそまつな原形。そざつという名のせんれん。クリシェをたちおとす。

息をみじかくくぎり、息で打つ。笛

の管をとおして、それとも声。ふいごの息。いそぎあしの反復音。らんぼうなくぎりのアクセント。ひっくりかえる声。ひびわれ、ひきさける笛ののど。

夜の時間

カール・クラウス

ぼくからこぼれる夜の時間

ぼくは思いあたり 思いめぐらし

思いなおす

夜はもうすぐおしまいだ

外で鳥がいう 朝だ

ぼくからこぼれる夜の時間

ぼくは思いあたり 思いめぐらし

思いなおす

冬はもうすぐおしまいだ

外で鳥がいう 春だ

ぼくからこぼれる夜の時間

ぼくは思いあたり 思いめぐらし
思いなおす

人生はもうすぐおしまいだ

外で鳥がいう 死だ

手は2本、あたまはひとつ。

まず片手のうごきを記録し、それを再生しながら、もう1本の手をかさねる。手はおたがいから自由になった。

反対に——

片手のうごきを両手にわけける。ふぞろいな、つまづく線ができる。

ブゾーニはピアノをひく手を3つの平面にわけた。内側——指1、2、3、中側——2、3、4、外側——3、4、5。キュビズムの絵のなかのマンドリニみたい。片手で2つのことを同時にできる。ひとつのこと、どの側でやるかでちがってくる。かれの演奏は異

様に見えたらしい。手が鍵盤にびったりはりついていて、時々ぱっとうごく。同時代のピアノリストのなめらかな手さばきにくらべて、不自然にぎくしゃくしていた。かれは独学だった。

準備をじゅうぶんにする。準備の準備もほしい。準備のなかでプロットをふくぎつにする。滑走路であとずさりしている。とんでしまえば、あっという間だ。その瞬間をさきにのばす。できるだけ。

条件をかぞえあげ、方法にこだわるのは、安全飛行のためではない。それより航路変更に賭ける。

ノートをとる。ノートをかきなおす。時間はこぼれていく。飛ぶ夢はうつくしい。それにくらべて、鳥はもうつくられてしまっている。改良の余地はない。

走る・その六 デイヴ・グッドマン

ひらひらのショーツ姿で、ソウル・ヒルトン・ホテルのエレベーターに乗る。鏡ばりだから、ぼくのうしろに立っている男たちがみえる。ビジネススーツに身をかため、革製のごく薄型のアタシエケースを片手にぶらさげているかれらは、白熱する韓国の経済にさらに拍車をかけるために、今朝も出掛けてゆくところである。エレベーターは十四階から下りていく。男たちは顔をしかめていない。ランニングウエアを洗っておいでよかったと、ぼくはほっとする。

先ほど、コーヒーがわりに飲んだコカコーラは胃のなかでぶくぶく泡立っている。ぼろぼろの靴下も、すでにくるぶしの下までさがってたるんでいる。空色と紫のチマを着たエレベーター嬢は、ロビーを横切るぼくに微笑みをかけて、ぼくは励まされた気持ちになる。回転扉を出て地図をみる。ちかごろ、

ホテルはこういうジョギング・マップを用意している。「ご希望なら、従業員がお供しますので、お出かけになる前の晩、アシスタントマネジャーまで「ご連絡ください」とも書いてある。外国にきて、走りたいけど自信がないという人もやはりいるわけだ。

地図をみて、目の前に聳える南山をみあげる。まさか。ホノルルもこうだった。ホテルが用意してくれたジョギング・マップに従って走ったら、ダイヤモンドヘッドを一周することになった。登山じゃないんだから、まったく。もしかするとこれは共産主義者の陰謀なのかもしれない、世界中のホテルのジョギング・マップをこうした殺人的なものにすり替えて、国際ホテルに泊まる資本主義者を自滅させようという、邪悪な企みなのかもしれない。

たわけたことを推理しているうちに

身体がどんどん冷えてしまう。これ以上ぐずぐずしてはいられない。ウォークマンのスイッチを入れてぼくは動きだす。流れてくる唄は、フォリナーの「異なれた世界」

*

「韓国はカイの祖国だから、韓国にいるこの一週間はカイが中心だ、そのうち君の祖国のペルーにもいくから、そしてたら君が中心になる」姉弟喧嘩を事前に防ごうと思って、六才になる娘のヤエルにこう説明した。二年前にわれわれの家族に加わり、一月に三才になった息子のカイのルーツを探しに、ぼくたち四人、韓国にきていたのだ。

カイは馬山という韓国南部の港町に生まれたと、ぼくたちは聞いていたので、電車に乗って、ソウルから馬山に向かった。韓国の国土を見物する、い

い機会にもなる、と思っていた。

ソウルを発って、五時間半後、馬山に着いた。イスラエル人の友達を紹介してくれた、馬山の顔役朴さんの運転手が駅まで迎えにきて、ロッチェ・クリスタル・ホテルに案内してくれた。

翌日の朝、カイが一時収容された馬山エイリ保育園を訪ねた。朴さんが経営する倉庫会社の部長で、日本語のできる、蘇さんがついてきてくれたから、ことばの心配はなかった。

馬山に着いて間もなく、カイは馬山出身ではなかったことが判明した。エイリ保育園というのは、慶尚南道地方の施設で、慶尚南道で孤児になった、あるいは迷子になった子供たちは皆一時的にここに収容されることになっている。徐副院長の話によれば、一時収容される子供たちのうち、四割は迷子で親を迎えにくる、三割は国内の施設に送られ、満十八才になるまで国が面

倒をみてくれる、一割は国内で新しい家族にもらわれて、残る二割は海外で養子になる。カイは毎年韓国から海外に送られる一万人の孤児のうちの一人であった、というわけだ。

カイが生まれたのは、馬山ではなかった。馬山から一八五キロ離れた蔚山だった。ぼくたちは朴さんと相談してタクシーで蔚山に向かうことにした。

*

蔚山に着いたのは五月一六日の四時ごろだった。灌仏会（花祭）だったので、ぼくたちが目指していた蔚山の市庁は閉まっていた。それで時間つぶしに、ホテルの横を流れる川に沿って散歩することにした。市民はグラランドで酒を飲み、歌をうたい、踊をおどっていた。ぼくは危うくつかまりそうになって、酒を飲まされるころだった

の腕を引っ張って、すたすたホテルのほうへ引返していった。

その晩、焼肉を食べながら、ぼくたちは大喧嘩をした。そして、灌仏会の大パレードがおそくまでホテルの部屋の真下を行進したその夜、外へ出ないで、わかりもしない韓国のテレビニュースをみて、落ち着きを取り戻そうと努めた。

*

子供を返しにきたと思われたらしい。蔚山市庁に十時きっかりに到着したぼくたちは、市長の部屋を訪ねた。言葉が通じないので、漢字で「市長」とぼくの名刺に書いて、通りがかりの人に、三階と教えてもらった。

「突然お邪魔します」というにも、いえないので、ぼくたちはつかつかと市長の部屋にお邪魔をした。「市長」

が、「哀号、あわれなる我が祖国よ、立ち直るのはいつの日か！」と顔を赤らめ、唇に赤唐辛子をつけて、ぶつぶついいながらぼくをつかまえた男を振り切って、逃げるように川に向かった。

「ほら、カイ、生まれ故郷の同胞たちは踊っている。華やかな民族衣装を身につけて、銅鑼をならして、踊っている。韓国人として、プライドをもちたまえ」と、川端でゴミを拾うことで、今にも母親を狂気に追い込みそうなのが息子に言おうと思っただが、振り返ると、「哀号、あわれなる我が祖国よ」の男がやってくるのが見えたので、駆け足でその場を離れた。

しばらく川岸を歩いていると、釣りをしてる男たちに出会った。魚籃にはフナのような魚がたくさんはいつているのに気づいて、「見たい！」と子供たちは騒ぎだした。いやだ、といっている和子を残して、ぼくは二人をつと書いた、さっきの名刺を秘書らしい若い男に差し出して、「ご用件は？」という意味のことをいわれた。ぼくはカイを指して、この子のことでうかがいました、と説明した。日本語でいっても英語でいっても、「あなたのいっていることが全然わかりません」という秘書の表情は変わらなかった。蔚山の市長の幹旋でカイが馬山エイリ保育園に送られた事情を説明した手紙を見せた。われわれ宛てのその手紙はもともと英語だったが、馬山の朴さんに翻訳してもらっておいだのだ。

「よしなさい、誤解されるわよ」と和子はいったが、こちらの目的を説明するのに、この方法がいちばん手取り早いとぼくは判断した。ところが、ぼくが渡した紙をみて、部屋中の人々があわてて話し合ったり、あちこちに電話をかけたらしはじめた。まずいな、とぼくは思った。アメリカ国籍であり、

れて、土手を下りた。岩に腰をおろし、カイを膝にのせて、春のうららを味わった。男たちはカイの顔をみて、ぼくの顔をみて、そして互いに顔をみあわせた。しきりに何かをいっているが、韓国語のわからないばかりには、聞き取れるのは「国製」と聞こえる言葉だけだった。ぼくは社交しようと思っただけ、そうだよ、この町に生まれた子だよ」と日本語と英語と両方でいってみたが、男たちは「こいつ、なに言ってやがんで。さっぱりわかんないじゃねいか」という意味らしいことを荒々しい口調でいって笑った。居づらくなったぼくたちは、「それでは、失礼します、またいつかお目にかかりましょう」と挨拶して、土手をよじ登った。

「だからいったでしょ」と不機嫌そうにまなざしてぼくたちを待っていた和子は、われわれ全員が感じはじめた旅の疲労を露にした。彼女はカイ

カイ・グッドマンという名前の、ぼくたちの息子であることを証明するカイの旅券を急いで取り出して見せた。「我々の息子です。ご覧のとおり立派な子供です。我々が彼を返しにきたと思われては困る」と、手も足も動員して、カイを指したり、自分を指したり、部屋を走り回ったり、なんとか理解させようとした。

カイたちは、ヤエルが背負ってきたリュックサックを開けて、人形を出したり、玩具の車をだしたり、市長の部屋の応接間セットに登ったり、ガラスのコーヒーターブルの下に潜ったりしている。写真を撮りたそうに先刻からうろうろしているカメラマンは、機会を狙っている。和子はソファに座って渦巻く状況に句読点を打つように、子らに注意したり、ぼくに指示したりしている。ぼくは紙をだして、擬似中国語で「我々の息子」、「調査」など、

思い当たる数少ない共通語のすべてを書き並べてみている。

蔚山市庁の公報室に勤めている李昌変さんが現れると、ぼくたちはかれを救いの神のように歓迎した。日本語ができるからだ。

話を通じれば、なんということはない。社会福祉部の係員がきて、社会福祉部に案内してくれた。「いま記録を探して見ます」と李さんは通訳してくれた。

戻ってきた係員は、カイの記録を持っていた。ハングルで書いてあるから読めない。李さんは記録を読んで、翻訳してくれた。

「子供の姓は朴です。蔚山市が彼を父親から預かったのは、八三年六月某日でした」カイは「捨子」で、両親のことなど一切不明だといわれていたぼくたちは、李さんの説明を聞いて驚いた。「父親は後で子供を迎えにきたの

だが、三日もたないうちにまた預けにきて、消息を絶った。市は探したが、行方がわからず、仕方なく子供を馬山に送った」

なるほど、そうだったのか。よかった。これでカイが大きくなって自らのルーツについて聞いたとき、ぼくたちは「お前は両親に捨てられた」という奇酷な宣告を下さないで済む。「お父さんは一生懸命お前を育てようとしたが、どうしてもだめだった。お父さんには、子供を見殺しにすることができなかったので、蔚山市に預けて、育ててくれる新しい家族を探してもらおうことにしたらしい」こう説明すればいいのだ。よかった。ほんとうによかった。

ぼくたちはカイの記録のコピーをもらって、彼が置き去りにされていたという住所にいったみた。眩しい五月の屋ごろだった。「コココーラー飲みたーい！」と騒ぎだっている子供たちの写

真をその家の前で撮って、カイのルーツ探しの旅を切り上げることにした。ホテルに戻って、荷物を取って、毎月行われる防空訓練が終わったところで、タクシーに乗った。釜山で飛行機に乗り継いで、ソウルに帰った。メダクシ、メダクシ。

*

「嘘だよ、そんなこと全然書いてない」子供が寝ついたころ、ソウル・ヒルトンに駆けつけてくれた友人の孫さん、はぼくたちが蔚山で勝ち取った書類を読んで、そういった。イリノイ大学のぼくの同僚であり、ソウルの延世大学の教授でもある孫さんは老眼鏡を持ってこなかったで、フロントで作ってもらった書類の拡大コピーをカクテル・ラウンジの薄明で読んで正確に翻訳した。

*

日曜日の朝六時半、昨夜頼んでおいたルームサービスのウェーターが、コーヒーとジュースとパンを部屋まで届けてくれた。八時半の空港行きのバスに間に合うように荷作りもしなければならぬし、レストランでゆっくり朝食を食べている暇はない。

カイザールにジャムをつけて、コーヒーを飲みながらぼくは窓の外を南山を眺めた。きょうは走る時間はない。このあいだ走って坂道は苦しかったが、戻ってきた時は、気持ちよかった。たまには坂道もいい。ランナーとしてのスケールがそれだけ大きくなるような気がする。

「まず、朴というのはカイの姓ではない。カイを預かっていた人の名前だ。それから、あなたたちが訪れた家はカイが捨てられた場所ではなく、朴さんの家で、カイは六ヶ月近くそこに住んでいた」

ぼくたちは啞然とした。蔚山の李さんはどういわけか、ひどいでたらめをいっていたのだ。だが、二杯目のピニャコラダを飲みながらぼくは思った。もし蔚山でいわれたことが全部本当だったとしたら、カイを蔚山市に預けた父親はいつか迎えにくるつもりだったのかもしれない。蔚山市は、彼の身元を知りながらも、よくない父親だと勝手に決めつけて、「子供のためを思って」捨子だという書類をでっちあげて馬山に送った、ということになるかもしれない。それではカイはかわいそう。いつまでもたっても疑問が残る。

だが、そうではない。朴さんという

人にカイを預けた父親は、カイを迎えにきたものの、その後ふたたび預けてしまった、というわけである。朴さんが知るにしても、父親の身元を蔚山市は知らない。朴さんはそもそも里親で、カイが一才になって這いだし、歩きだしはじめたら、もう育てきれないと、市庁に渡したにちがいない。うむ、幸か不幸かぼくたちの子になったカイにとっても、カイの親になったぼくたちにとっても、この話のほうはずっと説得力をもっている。

ぼくは孫さんに向かっていた。「それだったら、朴さんに連絡取ってみたい。六ヶ月も家の子の面倒を見てくださった方だし、お礼をいいたい。そして直接朴さんに聞けば、事情がもっとはっきりわかるかもしれない。手伝ってくれますか」

「わかりました」と孫さんは答えた。

編集後記

六月六日。小雨もよい。肌寒くてスト
ーブがこいしい。

日比谷の松本楼で藤本和子さんの「プ
ルス」だっただの頃、黒人女性のマ
ニフェスト」の出版記念会がひらかれ
た。藤本さんの古い友人、新しい友人
があつまって、彼女と彼女のしごとを
めぐるそれぞれの話を耳をかたむける。
新しい本が出ると、それを口実に仲間
があつまってお酒を飲んだりするとい
うことはよくあるけれど、きょうのは
もっと正式な感じのする出版記念会で、
それが証拠に、主役は金屏風を背にす
こし緊張気味にみえた。
小さい人間は小さい人間、小さい本は
小さい本である、とカラワンのストラ
チャイは夏に出る予定の本（詳細は次号

のかたより情報でお知らせします）に
書いてある。書くことは、こころの奥
深くに名ざしがたい幸福を与えてくれ
る作業で、視力と思考力と空想力を使
うだけのおしの世界だけれども、それ
は何ものにも邪魔されずに自分自身に
対して自由でいられる、そのような状
態なのだ、とも。

金屏風のまえに立つ緊張気味の藤本さ
んの姿に、校正刷りで読んだばかりの
ストラチャイのことばがかさなった。

出席した人たちもそれぞれナニカを感
じたらしく、出版記念会をやりたいと
言いだす人が複数にのぼった。出版記
念会をやるために本を出すというのが
流行するかもしれない。実際、まだ本
を出す予定すらないのに、出版記念会
の式次第のほうはきちんとできあがっ
ている人もいるのだから。
藤本さん一家は今月の末にアメリカに
帰る。約一年の滞在だった。（八巻）

* 予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利
用してください。

口座番号 水牛編集委員会

口座番号 東京四一九一七九二

購読料 一年分三〇〇〇円（送料共）

住所、氏名、電話番号、何号からと明記。

* 本誌は次の書店にあります。

横濱書（新宿） ☎三五二一三五五七

ブックイン（阿佐谷） ☎三三三〇一七八九七

信愛書店（西荻窪） ☎三三三三三四九六一

ワンラブブックス（下北沢）

☎四一一一八三〇二

アール・ヴィヴァン（西武池袋店12F）

カンカンポア（西武渋谷店B館B1）

ストアデイズ（六本木ウエイブ4F）

名古屋ウニタ書店 ☎七三二一一三八〇

水牛通信 第八巻第六号 一九八六年

六月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田

正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎〇五

東京都世田谷区新町2-15-13 八巻方

電話〇三（四三五）九六五八 振替口座

東京四一九一七九二 印刷所 御トライ

プリントショップ